

非主張的自己表現の捉えられ方についての研究

—受け手のコミュニケーションスタイルに着目して—

GH091012 : 渡 辺 光

指導教員 : 石井宏祐講師

I 問題と目的

話し手と受け手が互いを尊重し合う自己表現へと変容を支援するアサーション・トレーニングは、本研究で検討する“非主張的自己表現”をネガティブなコミュニケーションスタイルとして位置づけている。

しかし、メタ認知の分野ではネガティブとされてきたコミュニケーションスタイルを“敢えて”選択している可能性（石井，2007）が示唆されている。また、アサーション理論ではこれまで自己表現を話し手の立場だけで捉え、受け手の視点が軽視されてきた（三田村・松見，2010）ことが指摘されている。一方、対人認知の分野において渡部・相川（2004）は、受け手が非主張的な話者を親しみやすさとして好意的に評価することを示している。このように、受け手は話し手が認知するネガティブな側面に限らず、多面的に話し手の自己表現を捉えている可能性が考えられる。しかし、非主張的自己表現を適切な自己表現として扱い、受け手の視点から検討した研究は少ない。

三宮（2009）によると、十分にメタ認知が働かない場合、受け手が話し手の表現を誤解して受け取ることを指摘している。また、話し手の感情表出抑制を他者配慮的なものとして意欲的に捉える受け手は、話し手を高く評価することが阿部・高木（2006）により明らかにされている。つまり、メタ認知の働きやコミュニケーション意欲によって、話し手の非主張的自己表現に対する受け手の捉え方が異なることが考えられる。さらに、相手との関係の重要性認知が否定的対人感情の低減に影響を及ぼすこと（高木，2003）も示唆されている。そして、受け手がどのような話し手であるかも非主張的自己表現の捉えられ方に影響すると考えられる。石井（2007）によると、相手との親密性に応じて話し手自身が自己表現を使い分けていることが示されている。他にも、非主張的行動を発言抑制行動の観点から検討した畑中（2006）の研究では、発言抑制行動を行う者は否

定的結果やスキル欠如、他者配慮という意識内容を生起していることが示されている。

そこで、本研究では非主張的自己表現の多様な側面を明らかにするために、受け手のコミュニケーションスタイルに視点をおき、受け手が話し手の非主張的自己表現をどのように捉えているかを検討することを目的とする。ただし、本研究では受け手のコミュニケーションスタイルをメタ認知、コミュニケーション意欲、関係の持続性や非主張的な意識生起への認知的な意味づけに限定する。

仮説 1 自らの自己表現に対するメタ認知が高い受け手は、低い受け手よりも、話し手の非主張的自己表現をポジティブに捉えるだろう。

仮説 2 コミュニケーションに対する意欲が高くかつ自己主張を抑えない受け手は、そうではない受け手よりも、話し手の非主張的自己表現をポジティブに捉えるだろう。

仮説 3 話し手と持続的な関係が見込まれ、かつ自らの非主張的自己表現をポジティブに意味づけている受け手は、そうではない受け手よりも、話し手の非主張的自己表現をポジティブに捉えるだろう。

II 方法

調査方法 質問紙調査を実施した。

調査期間 2010年10月中旬

対象者 臨床心理学の講義を受講する大学生（18歳～29歳）を対象に質問紙を配布し、男女213名分を回収した。そのうち、質問紙が無回答であった1名を除く、212名のデータを分析対象とした。

調査内容 質問紙の構成は、①自己主張抑制尺度の30項目②社会的スキル遂行不安尺度の19項目、他者による自己への評価意識（気持ち）尺度の36項目③メタ認知尺度の10項目、コミュニケーション意欲尺度の7項目④話し手が示す非主張的自己表現の特徴として「スキル不安」、「配慮」、「非主張的な行動」、「自己抑制」を設定。4つの特徴それぞれに特性形容詞尺度の15項目⑤学校

やプライベートを一緒に過ごす友人として「特定の個人」または「グループのメンバー」を設定し、対人的動機尺度の11項目および発言抑制行動決定時に生起する意識内容に関する尺度の25項目を評定。

Ⅲ 結果と考察

1. メタ認知

仮説1を明らかにするために、因子分析結果を用いたクラスタ分析により分類されたメタ認知の高低群を独立変数とし、非主張的自己表現の特徴である「スキル不安」、「配慮」、「非主張的な行動」、「自己抑制」それぞれに対する各特性形容詞尺度について因子分析を行って得た下位尺度（以下、非主張的自己表現それぞれに対する特性形容詞の各下位尺度）を従属変数とする、対応のない t 検定を行った。その結果、全ての特徴において有意差はみられず、仮説1は支持されなかった。このことから、質問紙の構成に問題があったと考えられる。今後の課題として、メタ認知を再検討する必要があるだろう。

2. コミュニケーション意欲

仮説2を明らかにするために、因子分析結果を用いたクラスタ分析で分類されたコミュニケーション意欲と自己主張抑制の高低群を独立変数とし、非主張的自己表現それぞれに対する特性形容詞の各下位尺度を従属変数とした2要因の分散分析を行った。その結果、「配慮」に有意な交互作用（積極性： $F(1, 195) = 6.01, p < .05$ 、親しみやすさ： $F(1, 192) = 4.02, p < .05$ ）がみられた。しかし、仮説2を支持する結果は得られなかった。むしろ仮説に反して、自己主張をする受け手は、コミュニケーションに対する意欲が高いよりも低い方が、話し手の非主張的自己表現をポジティブに捉えるという結果を得た。つまり、受け手は話し手の「配慮」を好意的なものとして受け取ることがわかった。また、受け手が話し手と同じ非主張的自己表現である場合は、ネガティブな捉え方をするという結果を得た。これは、受け手が話し手と同じ自己表現タイプであるときは、話し手の自己表現と自らのコミュニケーションスタイルを重ねて捉えていることが示唆された。以上のことから、非主張的自己表現の他者への配慮がネガティブな意味合いだけではないという先行研究（阿部・高木, 2006；柴橋, 2008）を支持したと共に、コミュニケーション意欲によって受け手は話し手

の非主張的自己表現をポジティブに受け取ることも示唆した結果であると考えられる。

3. 関係の持続性と非主張的自己表現の意味づけ

因子分析結果を用いたクラスタ分析により分類された「時限的親密関係」（一時的な関係）、「維持重視関係」（今後も持続が見込まれる関係）、「拒絶的維持関係」（嫌々ながらも付き合いを続けている関係）と受け手の非主張的自己表現の意味づけ高・中・低群（ネガティブ・中立的・ポジティブな意味づけ群）を独立変数とし、非主張的自己表現それぞれに対する特性形容詞の各下位尺度を従属変数とした2要因の分散分析を、「特定の個人」または「グループのメンバー」という話し手の想定別に行った。

グループ 「スキル不安」（積極性： $F(3, 123) = 12.03$ 、親しみやすさ： $F(3, 124) = 6.72$ 、ともに $p < .001$ ）において、仮説3を支持する結果が得られた。つまり、受け手がポジティブな表現として自らの自己表現を意味づけ、かつ話し手と維持重視関係であれば、話し手の非主張的自己表現をポジティブに捉えることが示された。また、「非主張的な行動」において独自の有意な交互作用（社会的望ましさ： $F(3, 124) = 4.21, p < .01$ ）が認められた。よって、グループという集団では、話し手と今後も持続が見込まれる関係よりも一時的な関係である方が、受け手は話し手の非主張的自己表現をポジティブに捉えやすいことが示されたと考えられる。

特定の個人 「自己抑制」（積極性： $F(3, 50) = 3.07$ 、活気： $F(3, 49) = 4.21$ 、ともに $p < .05$ ）に、独自の有意な交互作用がみられた。つまり、話し手と今後も個人的な関係を持続させたい維持重視関係であるときは、話し手の非主張的自己表現をポジティブに捉えることがわかった。ただし、受け手が自らの自己表現を中立的に意味づける場合に限定された。ネガティブあるいはポジティブなものとして極端に意味づけてしまうと、受け手はネガティブな捉え方をすることがわかった。したがって、話し手と個人的に持続が見込まれる関係であれば、受け手自身の自己表現に対する意味づけによって、話し手の非主張的自己表現を多様に捉える可能性が示唆されたと考えられる。